

# 哲學雜誌

第三百七十四號  
大正七年四月一日發行

- 進化論と歐洲大戰……………文學博士 井上哲次郎
- 否定の研究(完)……………文學士 今福忍
- 三階級の普法に就いて(完)……………文學士 矢吹慶輝
- スコラ哲學に就いて(完)……………文學士 征矢野晃雄
- ウィンデルバント「論理學の原理」……………文學士 近藤哲雄
- 現代の神秘說に就いて……………文學士 四宮兼之
- 學會彙報……………
- 寄贈書籍及雜誌紹介……………
- 最近内外哲學界……………

哲學編輯

## 哲學會役員 (五十音順)

### 會長

小石川區表町一〇九

文學博士 井上哲次郎

### 評議員

- |                  |                                 |
|------------------|---------------------------------|
| 小石川區白山御殿町一一七     | 文學博士 姊崎正治                       |
| 本郷區駒込富士前町五三      | 文學博士 井上圓了                       |
| 本郷區駒込西片町一〇、八一號   | 文學博士 大塚保治                       |
| 本郷區駒込千駄木町五〇      | 文學士 大島正徳                        |
| 本郷區駒込千駄木町五七      | 文學士 紀平正美                        |
| 牛込區北町三四          | 文學博士 桑木殿翼                       |
| 豊多摩郡千駄ヶ谷町九〇二     | 文學博士 高楠順次郎                      |
| 豊多摩郡代々木村大字代々木一八五 | 文學博士 中島力造 <small>(會計監督)</small> |
| 豊多摩郡戸塚町字諏訪二四五    | 文學博士 服部宇之吉                      |
| 京都府愛宕郡田中村西浦二二    | 文學博士 波多野精一                      |
| 小石川區小日向臺町二ノ一五    | 文學博士 松本亦太郎                      |

### 編輯委員

- |              |            |
|--------------|------------|
| 赤坂區新坂町八二     | 文學博士 三宅雄二郎 |
| 小石川區林町三一     | 文學博士 村上專精  |
| 豊多摩郡千駄ヶ谷町九〇二 | 文學士 吉田静致   |
| 小石川區白山御殿町一一〇 | 文學博士 吉田熊次  |

### 庶務委員

- |               |                               |
|---------------|-------------------------------|
| 本郷區駒込千駄木町四二   | 文學士 伊藤吉之助 <small>(主任)</small> |
| 本郷區駒込蓬萊町一、浩妙寺 | 文學士 四宮兼之                      |

### 書記

- |                |                                 |
|----------------|---------------------------------|
| 小石川區林町六三 第二眞心寮 | 文學士 鈴木弘                         |
| 文科大學事務室内       | 清島重徳 <small>(小石川區水道町三九)</small> |

編輯者 東京帝國大學文科大學哲學研究室内 伊藤吉之助  
 發行者 東京市神田區南神保町十六番地 岩波茂雄  
 印刷者 岩波茂雄

の方面乃至認識的方面などを混同したりして來た所もあり。又其上に單なる形式的の方面にのみ囚はれ、殊に文法などの形式に囚はれなどして、種々の異説が現はれて、一致して思想を生ぜずに居るものと言へる。其故に是等の研究をなす上に於ては先づ充分に此の心理學的の方面を明らかにし、次に論理學的の方面に於ては其の形式的の方面の意味を明瞭になさなければならぬ。又是等の方面とその認識論的の方面とを區別して行く必要がある。尙ほ否定の事に就ては斯様な今まで述べた所のものを前提として種々述べたいこともあるのである。又今晚は少しも形而上學的の方面のことには説き及ばなかつた。此の方面はまだ十分に纏りもせず、また幾多の難問が伏在して居るので、今後の研究問題となすのであるが、兎に角哲學的考察の Beweggrund としての否定とか、思维的活動の方法として、また辯證法としての否定の意味とか、或は哲學的の原理を定むるにその原理としての價值を規定する所のものとしての否定即ち原理が否定に由つて何れだけまで規定せられるかなど種々な問題が残つて居る。又論理學的の方面に於ても種々述べたいことがあるが、餘り長くなるので今は如上の點だけに止めて置くのである。(完)

### 三階教の普法に就いて(完)

矢 吹 慶 輝

三階教の教籍今散逸して公に流行するものなし偶々英京大英博物館内スタイン蒐集寫本中に七種の斷片を得、之を群疑論並に同探要記等に引用せらるゝものと對照するに未だ符合を發見せず。乃ち本篇は古來散逸して今新に得たる是等諸斷片に基き主として三階教の根本義たる普法の思想を叙し且つ斷片を紹介し併せて諸書に散見する三階教に對する批評を批評せんとせしが今僅に斷片の紹介と普法の叙述とを以て既に本誌三號を重ね頁數も亦漸く百に近づかんとす。而して主要なる問題の尙着手せられざるもの一二にして足らず、就中、支那教判史上に於ける三階教並に普別二法、普解普行の實習的方面、三階教と淨土教、三階教と地藏教、三階教と經典論の如きは三階教の紹介に逸すべからざる論題たり。是に由りて更に他日題を改めて餘他の諸篇を收むるに決せり。讀者諒焉

京都富岡謙藏氏が子が本篇を草するに方り其珍藏の斷片副本を貸與せられしは謹んで其厚意を深謝する所なり憶むらくは本篇中に収録の機會を失せり併せて更に他日を期せん。

### 七 生盲佛法

三階教の普法に就いて

懷感は群疑論卷四に三階師が普佛普法を主張し凡聖同視の旨を傳へて

只如信行禪師作生盲觀、不別前境是聖是凡、總爲聖解普敬設要、汝三階師既不別是佛是魔亦須摠敬作真佛想(淨土全書六の五三)

といへり。所謂如來藏佛性佛は當然佛想佛なるが故に法の高下を論ぜず(機)の凡聖を判ぜず魔佛等しく敬歸すべしとは生盲觀の本義なり。此に生盲觀とは生盲衆生佛法觀の義にして群疑論探要記卷六に三階集録の文を引き生盲衆生佛法の義意を叙せり、曰く

明第三階機修普別得失相、謂第三階若學普法不墮愛憎不謗三寶、唯有純益無有損壞、此普亦名生盲衆生佛法、譬如生盲不分衆色普法亦爾於一佛乘及三乘法、不論是非普能信故、於諸賢聖及一切凡莫辨勝劣俱歸敬

と。即ち普法を修するものは法に愛憎を設けざるが故に一法を尊んで他法を斥くことなく又従つて謗法の罪過を免れ純益無損の佛法となすなり、別法佛教は總て上述に反し有眼衆生の佛法にして第三階生盲の衆生に對しては純損無利の佛法となす、換言すれば生盲の如くなる第三階を教化するが故に生盲衆生佛法となすなり。探要記は又集録一の文を引き、常に一切第三階佛法内一切二十四段等最下下得惡得

苦の普眞普正佛法僧を學すれば衆生斷惡修善解行等常に正に常に錯まらず常に一切正法を誹謗せず常に一切賢聖を毀咨せず乃至凡夫等常に一向に唯純の益のみありて佛法を損することなく又常一向唯純偏學一切衆盲衆生佛法と名くが故に淨土全書六の二九七といへり。空見有見の衆生にして法に別眞を認め機に愛憎を設くるは謗三寶罪を犯すこととなり縦令遠々微縁となることなきに非るも普信、普行、普解の錯謬なきに如かずとは前節第三階の對根起行の歸結となす。但し斯くして他の總てを佛と觀じつゝ何故に三階師自らは頭陀苦行を取てし自らに佛想佛を認め得ざりしかの疑問に關しては且らく次節に譲らん。

生盲衆生佛法の立義は所說普通と異なるものあり此故に懷感は、按禪師立教之意以當根佛法爲宗、將爲得聖教之旨歸、陵、架、於、古、今、學、者、然禪師以其三義尋教知是當根法門、一依時二約處三准人、詳禪師立此三門(三階)求諸教意、可謂妙即妙矣能即能焉。然古來盛德雖探蹟幽微學該内外義兼半滿窮法門之巢穴究眞乘之秘藏未有禪師作斯以判宗旨也(淨土全書六の四九)といへり。知るべし當根佛法の主張、普眞普正の宗義は寔に古今學者の常轍を脱せるものなるを。但し懷感は口を極めて三階教に難破を加へしも尙可謂妙即妙矣能即能焉といへり。

第五斷片は上述如來藏佛、佛性佛、當來佛、佛想佛を叙し次に普眞普正の義を叙して謂如來藏佛性體遍法界不邪不僞故名普眞普正佛法といひ又

若就能學人說、无問正見邪見大乘小乘、習學之者普得眞正故名普眞普正佛法といふ。前者は法體の普を説き後者は修行者の普を言へり。斯の如く普の佛法は不邪不僞根本の佛法にして超然として枝末名相の佛法に非るが故に第五斷片は普眞普正佛法の異名を列して下の如くいへり。

准經義推說體用功能不邪不僞名普眞普正佛法、非是一切別眞正故、亦名一切根本佛法、非是一切枝條故、亦名體佛法、非是一切想故、亦名義佛法、非是一切名故、亦名迢然別佛法、非是一切同而異故、以上五種准經義推說亦名眞因佛性佛法、非是一切緣因佛性故、此一種依涅槃經第三十六卷說

名けて迢然別佛法となすもの髣髴として超入醍醐といひ純圓獨妙といひ格外別風といふの口吻に類す。第五斷片は更に曰く

若是此迢然別普眞普正等六種佛法解者即與法界七普相當、所謂普凡普聖普善普惡普邪普正普大乘普小乘普空普有普世間普出世間普淺普深俱得眞正、若不與此普眞普正六種佛法普凡普聖等七普相當者即不免滅一切佛法盡

と。法界七普とは凡聖善惡邪正大小空有世出世淺深の七對に於て悉く普を認めて別を認めざるをいふなり。蓋七普に對するものは七別にして七別は何故に非なるかを辨せるものに曰く若し普凡普正の解をさらずして別凡別聖の解を作さば則ち同にして異を識るべからず涅槃經說に准依するに佛道く我賢劫中に於て屠兒魅膾身姪女直婦身田獵漁捕黃門二根等身と作り或は慳貪身と作り或は纏蓋と作り賊劫盜不信因果習行非法等種々惡身と作りて凡夫身に同じ又九十五種外道經等は一切邪神鬼魔を説き衆生を惑亂するが故に諸佛菩薩等の身を現じて聖人身に同ずと。

此同異も亦識るべからずと。即ち聖人に非ずんば聖人を知るを得ざるが故に凡聖を識別し得ざる凡夫當根の佛法は須らく普凡普聖の普法に據らざるべからず然らずんば應化の聖人所現の凡夫身と低下赤裸の凡夫身とが如何にして區別し得らるべきか。凡聖判別し難きが如く眞善眞惡も亦凡夫識知の境界に非ず斷片十輪經を引用せり若し別法を固執し別邪別正の見解に立たんか涅槃經に所謂邪見人も無因果を説き正見人も亦無因果を説けり然らば彼此の邪正如何にして之を判定すべき。法花經の繫珠の聲聞は本是れ大乘根にして現に小乘法を學せるものたり又十輪經に實は是れ緣覺根にして現に大乘法を學せるものとの大同小異畢に識知すべから

す、空有世出世、淺深の對立の如きも別法は法の本體に非ずして能行人の心地は得て識別し難きを以て如かず法界七普相當の佛法を須むんにはとは三階教生盲觀主張の要旨なり。

第一斷片第二大段所行法分齊義中、先學普佛法後學別佛法の一段あり、先づ普法を學すべき理由を説けり、今説明の煩鎖を簡明にせんが爲に之を表示すれば下の如し

先學普佛法有二段

一者明上佛徹下佛——三種……(イ)  
二者明下佛徹上佛——三種……(ロ)

(イ)の三種とは(一)佛體(二)名(三)出果德佛果德の事にして(一)佛體の解釋文に曰く

報佛法界恆沙功德普皆滿足、莫問淨土穢土皆見淨土據報身體都无上下對衆生故有上下如華嚴經説

と。報身體都て上下なく衆生に對するが故に上下あるに過ぎずとは其主眼なり。

(二)次に名とは

同名異名佛多少與盡虛空遍法界微塵數一種相似

の義にして更に(三)出果得の中には諸經を引用して上佛下佛通徹の意義を明せり。且らく寶雲經によりて九階德を説き如來大慈を起せば一切衆生も亦大慈を起し大

悲を起すも亦之に同じく説法不可窮盡辯才不可窮盡天眼天耳等亦然り、如來は三達無碍智を以て一切を刹那に知る云云の文と涅槃經の一切佛十號あり一々皆虚空を盡す云云の文と及び觀佛三昧海經の如來眞身凡夫心想境に非ず、如來大慈大悲を念じて隨喜心を生じ无量福を得る等の文を引けり。斯くて佛體と名と果得と其何れの點より見るも上下貫徹して普佛の義を出でざるを主張せり。

第四斷片は上述生盲衆生の佛法に關し稍根本問題に入り不可知論を主張せり、左に其一例を舉げんに

問曰法可解不、

答曰法不可解名爲解法、无形相不可以形相解、法无处所不可以處所解、法无善惡不可以善惡解、若能知法无名无相无知无解名爲解法門。

法无善惡不可の下以の一字を補ひ爲解法門の門字閉に作る今並に之を改む

問曰法可解不、

答曰若如、如可識、即非眞如、以不識故是名眞如、正以不識爲識、不知爲知、不覺爲覺、不得爲得、不解爲解、中略法實无相故不可識、法无實相亦不可見、乃至諸佛及諸菩薩亦不能見、以不可見名爲正見

不解爲解不。解の二字を脱せるが故に今之を補ふ。

斯くの如く不可知論を説き之に由りて菩提、彼若菩薩、佛等の意義を示し更に大乘入道と小乘入道との差異を述べて小乘入道は「修空斷結不化衆生」に在り大乘入道は「解眞如實相不生不滅」一解之後更无退轉始終常一苦樂无變長生不欣朝死不滅觀生若倚觀死如歸、諸惱所逼性若虛空、我所之心畢竟不起身不傾動猶如大地……種々施爲教化衆生无疲極相」といへり。普法を敷衍するや時に附會の説をなして身々所作處自成「普正何故善之名遍薩之名普」といひ菩薩は普遍の義なるが故に菩薩の所作悉く普正となすの義なるが如し。

要之、生盲第三階の人は一乘三乘に對し是非を論ぜず又賢聖凡夫に對して勝劣を見ず普信普解愛憎を設けざる佛法を學ぜざるべからず、彼の有眼衆生の佛法たる別法が第一階の人は唯だ一乘を學し第二階の人は唯だ三乘を學し法に一乘三乘を別かち人に賢愚を判ずるが如くなるべからず、蓋別法は正見成就の衆生に在りてのみ能く其目的を達し得べきも有空見の第三階人は人既に偏見なるが故に必ず法に於て普に依らざるべからずとなす。

第一斷片中、前述、先學普佛法後學別佛法の下に於て生盲佛法は普法たらざるべからざる

らざると共に普法は單に生盲衆生に對する方便説に非ずして根本佛法たる所以を叙し下表の如き對照をなせり。

普法……體佛法……根本佛法……生盲衆生佛法……世間菩薩佛法……自利得苦得惡別法……相佛法……枝條佛法……有眼衆生佛法……出世間菩薩佛法……利他得苦得樂

八 普敬

普法普佛の教説は一切の法及び一切の人に對して差別を認めず愛憎輕重を設けざるが故に普敬は普佛思想當然の歸結となす。

第一斷片中、第二大段明所行法分齊義の下、四段に分る。一者明所行法之次第、二者明損益、三者明淨土因果、四者明三佛因果是れなり。此中第一所行法之次第中、又八小段あり其八小段中の第一先學第三階佛法の項下、更に普敬、認惡、空觀の三種を數ふ。茲に普敬の何物たるかを詳説せり。普敬の下、八項あり左に其要點を摘記すべし。

(一) 如來藏佛は一切諸佛菩薩緣覺聲聞乃至六道衆生の本體にして有情界千萬差別を現するも其根柢たる如來藏に在りては常に一貫して變化なく阿耨達池の池水八大河に分るゝも水體異なることなきが如く伎兒種々の伎を演ずるも身に異りなきが如く泥像差別あるも土體に變化なきが如く千浪萬波水體に差なく金具種々の形を

取るも金體同一なるが如し等の譬喩を以てせり。是れ先きの如來藏佛の思想に基き一切を如來藏より見て佛陀と見做し普敬を行ずるなり。佛性佛よりするも當來佛よりするも將た佛想佛よりするも一切衆生佛たらざるなく既に一切衆生といふ凡聖は固より邪道を行ずるものも亦此外に出づべきに非ず故に斷片當來佛の下に一切四衆等現に邪を行ずるも皆當に作佛すべきが故に等といへり。就中此普敬が正邪の區別を設くべからざるの義意は次の普正普眞佛の明文とす。

(二)普正普眞佛莫問正邪邪人學亦得眞正何以故如來藏佛性體唯是普法唯是眞法於中无有邪魔得入其中是故不問邪人正人俱得眞正(括弧内正邪の二字原文を補ふ)

(三)無名想佛法によれば(1)衆生の體如來藏なるも眞佛の名と相となく又(2)衆生唯た是れ如來藏にして更に別名別相なし此兩點より見て衆生悉く無名相の佛陀たらざるなきなり。

(四)拔斷一切諸見根本佛法とは一切差別の諸見を除ける根本佛法の義にして是によりて普敬を行ぜざるべからず。先づ(1)如來藏の體悉く聖性を有するが故に其體を敬して其惡を見ず又(2)衆生の體是れ如來藏更に別法なし唯た四種佛等と作りて

六遺善惡等を見ざるが故に其體に就き其普法に就て普敬を主張するなり。

(五)悉斷一切語言道佛法とは唯た衆生の體を敬ひ善惡六道等の名を説かざるをいひ此意義よりせんか須らく衆生の名相語言を離れて普く敬禮せざるべからずとなすなり。

(六)一人一行佛法よりするも亦普敬に出でざるべからず此に一人とは自身は唯た是れ惡人と知るをいひ一行とは自身以外に於て如來藏佛等の四種普佛を認め法華經常不輕菩薩の例に倣つて普敬普禮を行ずるをいふなり。

(七)无人无行佛法によりての普敬とは自身及び他の一切衆生同じく是れ如來藏にして別體あることなきが故にといへり。是れ第三階佛法三種(普敬認惡空觀)中の空觀に基くもの如し。

(八)五種不忤盡佛法

一自他不忤不爲自身不共邪善道俗往來

二親疏不干不學當根佛法者不共往來

三道俗不干一切邪善道俗不與親友往來

四凡聖不干一切聖内多有邪魔一切凡内多有諸佛菩薩凡夫生盲不能別得是故凡

聖不干唯除乞食難(雜歎事因緣)共往來者不在其限

以上八項によりて普敬を主張するも其根基は畢竟衆生の本體如來藏佛を敬禮するなり故に五種不忤盡佛法を二分し其一に曰く身他俱是如來藏唯作一觀不作自他道俗貴賤凡聖等解」と。

要之、普敬は普佛の思想により普佛の根據は如來藏佛性説に基けり。但し如何なるか是れ聖人、如何なるか是れ凡夫かは得て凡人判知の境界に非ず斯くして生盲衆生の佛法を主張し之を以て第三階當根佛法となすもの之を三階教の宗旨となす。以上八段を以て普敬を叙し了りて第一斷片は之を二意に要約し

八段内更有二義、一生盲生聾生癩衆生佛法、二者死人佛法

といへり。普敬は總てに於て愛憎を認めざるが故に其慈悲も亦親疏の別をなすは小慈悲にして普慈普悲に非ず、故に第七斷片に曰く

×××衆生無始以來皆○○○○○妹夫妻男女等遍故名普慈普悲。

## 九 認惡

三階教が普法に基きて普佛を説き又普佛思想當然の行事として普敬を主張する

は前既に之をいへり。但し若し唯だ普佛普敬のみならんか世界を擧げて悉く如來藏佛たり、抑も三階教徒の各自も亦一々の如來藏佛たり、凡聖差別の假面を去りて其本體に就き其根本に辿らんか一切は皆佛に非ずして何ぞ。他に對して普敬普禮を説くと雖とも抑も敬禮せらるゝ人と敬禮する人と元と同格に非ずして何ぞ。佛が佛に敬禮するは何等宗教的行事の價值を認むべきなきに非ずや。茲に、多、偶然、必然、の問題は再び三階教普佛思想の中心論題たり。唯佛與佛は佛ならざるものに取りて全々無關係の事實たり。宗教は毫末も宗教の價值を知らざるものにおいて無用なると共に無極に其價值を了了せるものにおいて亦無用たり。佛を以て佛を禮するは唯佛與佛乃能窮盡に同じく即ち後者の無用論に歸す。人々悉く佛たらんか畢竟人々の區別なし即ち唯一佛に歸し一元となり多人多行の差別觀を失ひ(前節無人無行參照)何の必要ありて三階佛法に歸し自ら如來藏佛にして當來佛たるに今更めて頭陀苦行を敢てするの要あるか。古來の大哲學者は多く一元觀を取りて尙差別觀を棄て去らざりしが如く普法佛教も亦多と偶然とを顧慮せざるを得ざりき。特に正像末の三時説は末法衆生は有空見邪見差別觀の衆生となすに於てをや。普敬を教へつゝ認惡を説くもの寔に如上の意義に於て深趣ありといふべし。是ある



によりて三階教は宗教たるを得たりしなり。敬するものと敬せらるゝものとの普敬の根據として又第三階佛法が普法たらざるべからざる出發點として將又三階教が破れ圓頓たらず空亂意勝鬘經說たらずして能く行實ある宗教たるを得たりしものとして認惡の説は普法普敬の教義に離すべからざる要素となす。固より三階教は普佛(一)が如何にして其真相を顯はさず認惡の世界(多)となりしか。普佛なるが故に普敬といふは可なれども普佛の間に果たして敬を致すべき必要何處にかある。抑も敬するは普佛思想の必然なりや敬すると敬せざると換言せば普法に歸し三階教徒たるものと否らざるものとは何に由て差別せるか。如來藏佛の開顯は必然か偶然か。凡そ是等の論點は不可知論に立脚せる三階師の敢て解決に努力せざりしものゝ如し、抑も如上の論點は哲學史上今尙未決の疑問なりといふを至當とすれば單り三階師に之が解決なきを攻むるは酷といふべし。

第一斷片の認惡は前後十二種に分たる例によりて分類重複を免れず今唯だ其要點を記するに止めん。

一者其心顛倒常錯謬常行誹謗語  
心に第三階佛法以外を念じ口に如來藏佛法以外を念ずるをいふ。

二者善惡兩種顛倒

(1) 邪魔が佛菩薩の形像をなすも其善を見て又邪魔を見ず、即ち善に非るものに善を見るが故に之を顛倒といふ。

(2) 佛菩薩種々衆生の身を現ず其惡をのみ見て又善を見ず、即ち善に於て惡を見るが故に顛倒といふ。

三者内外四種顛倒

(1) 邪貪邪瞋邪痴 (2) 神鬼魔輔心

四者一切經律論常說純說顛倒。但使一切經文内唯說顛倒衆生是惡、不說是善故、名一切經律論常說純說顛倒。

五者七種別惡顛倒

(1) 三階 (2) 三聚(正邪不定) (3) 法説 (4) 喻説 (5) 無慙愧僧 (6) 恒沙 (7) 人名常設

(?) 最多阿鼻地獄果(?)

六者六部經説○名顛倒

(1) 一切佛不救 空見有見顛倒衆生、(2) 一切法不救(1) 大小乘各他を嫌ひ十二頭陀比丘滅し即ち阿鼻に墮す、如大集經 (2) 讀誦十二部經に勉めず反つて佛を謗し現身

に十方阿鼻地獄に墮す、如涅槃經說[3]一切僧不救[4]一切衆生少救[5]一切斷惡修善不救七者十一部經說邪盡顛倒

[1]迦葉經[2]大集月藏分經說明法滅品正法悉滅[3]阿含經說正法滅盡[4]十輪經一切悉起斷常[5]薩遮尼乾子經一切三種顛倒[6]摩訶摩耶經第二卷說文當佛滅度一千年已後唯有兩個比丘學作不淨觀正坐禪不起高下彼此是非心[7]大盤涅槃經一闡提五逆罪如大地土[8]最妙勝定經[9]大雲經[10]佛藏經說正人唯有一人兩人[11]觀佛三昧經

八者四部經說出顛倒  
[1]摩訶衍經說三毒顛倒[2]勝鬘經說二見顛倒[3]薩遮尼乾子經說三種顛倒[4]涅槃經說種々顛倒

九者兩部經說純顛倒

[1]像法決疑經說過千年後像法之時四輩所作名利の爲にして出世心なし[2]佛藏經說増上慢の比丘一念涅槃を求むる心なし

十者兩部經說常顛倒

[1]常沒[2]常行惡[3]常爲無明所纏繞[4]其心顛倒常錯謬[5]常汗身口。此五段如涅槃盤經說。[6]心常遠離棄捨眞實一切法味[7]常爲煩惱及諸邪見云云[8]常行誹謗。此三

段十輪說

十一者三十二種偏病……總有二四、一五、二六、一七、一四、二四とは二種の四病、一五は一種の五病か)

一五者[1]自他(自に好を見他に惡を見る)[2]上下(衆生上佛法を學んで下佛法を學ばず)[3]普別(普法を顧みず別法のみを學ぶ)[4]善惡(内惡を省みず外惡のみを斷ず)[5]自利他唯だ利他を行じて自利を行せず)

一六者[1]名聞[2]利養[3]結衆[4]多聞[5]勢力[6]勝他、二六者[1]貪[2]瞋[3]痴[4]神魔[5]空見[6]有見

一七者[1]深責(爵衆僧遣還俗滅一切三寶)[2]邪正亂雜盡[3]天龍八部出國盡[5]使一切有緣佛法不相當盡[6]一切根機不相當盡[7]藥病不相當盡

十二者滅三寶三突盡顛倒

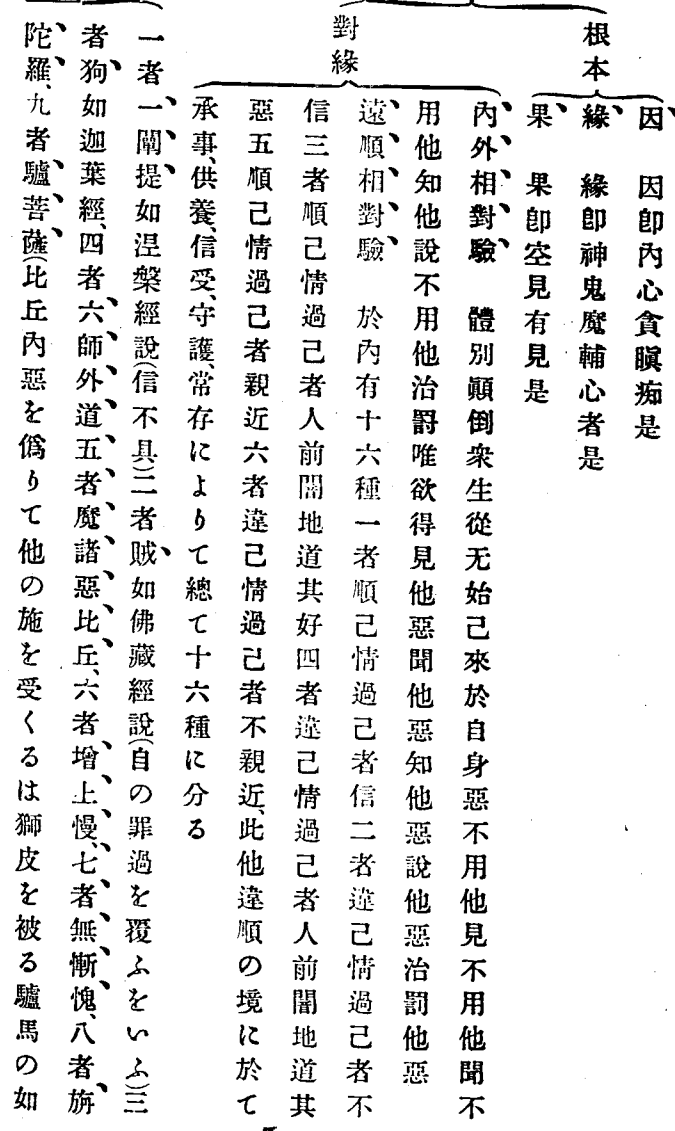
以上認惡の種目は前述第六第三階の對根起行中特に第五斷一切惡を參照すべし第八普敬と第九認惡とは第二段所行法分齊義中第一所行法之次第の要目にして第一大段は能行人に關せり、此中第一普別兩根分齊の中、二能行人有病無病分齊義の下、明驗體別根機の中に三階教所說の認惡が聊か他と異なるものあるを知るに便な

三階教の善法に就いて

る分類あり左に之を表示すべし。

二者明驗能行人有病无病分齊義於內有二種一者明驗體別根機十二種顛倒衆生於內有兩段一者就病驗二者就行驗

一病驗



二行驗

し如十輪經説十者名、神、諸、惡、比、丘、於佛法内實無所知於他行佛法人邊強作中正是名神、十一者名、鬼、諸、惡、比、丘、難得心服詐作親友與鬼相似、十二者名、九、十、五、種、外、道、

就中三階師が自己に惡を認め他に善を認むる教義は第一斷片中の體普行普の一節なりとす(第一大段能行人の中第二明能行人見所行法及時節分齊義七項の中第三二種出世境の下)

所謂體音とは如來藏佛性八種佛法をいひ行普とは中に於て七段あり

(1) 普、凡、普、聖、一乘三乘不定の機に於て凡聖を問ふこと莫く俱に聖解をなす又凡夫生盲凡聖を別たす邪魔時に佛菩薩の形像をなすことあり故に一切佛なるを認めながら敢て眞佛想を作さざるをいふ。

(2) 普、善、普、惡、一切顛倒衆生無始以來違情處に於て惡解をなせるも佛法に入りて凡て惡を見ず何となれば正見成就衆生緣に遇つて惡を作すと雖も惡人内に在りて一世二世即ち出世聖道果を得るが故に「普惡俱善故名普善」不問善惡普作善解故名普善。然るに普惡とは自心内に於て惡のみを見て善を見ず無始以來自己に對する善解を破するをいふ。

(3) 普正普邪 他人に正のみを見自身に邪のみを見る  
 (4) 普大普小 他人に於て大小俱に大乘の解をなし(像法決疑經を引けり)自身に對し  
 普小の解をなすをいふ。

(5) 普世間普出世間 (6) 普正普邪 (7) 普眞普僞も亦上に例して知るべし

第一斷片本文終りに附加せられし問答は他に普敬を表しつゝ主として自に認惡を標榜する矛盾を説明せんとせるものなり。今其要文を摘記せん。

若自他俱見善即自見惡不徹若自他俱見惡即敬他善不徹譬如兩國共戰必須別自國軍衆著黃他國軍衆著赤國々軍衆別有記識鬪戰用力即齊可有勝劣若兩國軍衆其相一種不別自許軍衆衣半黃半赤他國軍衆衣亦半黃半赤即不任鬪戰何以故彼此相同故。

斯くして普佛思想は三階教の根本義なれども實修上には自に多惡を認め普惡普善の二面的世界觀に立脚せり。次に三階教徒の信行即ち認惡上の實修に就て述べん。

十 普行

第一斷片の終り本文外(?)に於て問答あり普法佛教に對する論難を集めて之を辨

明せり。今其三問答を引用し先づ普法不畏と下學佛法と先學自利との普行實修の根據に就て述べん。

問曰末世學道邪魔至多不畏壞其善根

時は第三階に屬し邪師魔說橫行の時普法實修の善根を破壞すること無きかとは其問意にして併せて普法普佛の思想は其當然の歸結として正邪佛魔の區別なかるべく何を修し何を行じてか普法の修行たるを得んととの問意を含む。

答曰不畏但此普法乃是出魔境界何以故由行法具足故普法は愛憎差別を撤せる本體佛法にして行法缺くる所なく邪魔の關係を超越せり敬他身上八種佛法自知己身有十二種顛倒瞋即不生作一切空觀不淨觀故貪即不起己貪瞋无故痴亦不生貪瞋痴無故一切惡自然自滅。(八種佛法は維摩の八法にして本篇五當來佛佛想佛の下を十二種顛倒は九認惡の下を參照すべし。自然自の下滅の一字を補ふ。喻如一切草木因地生長若地壞已一切草木亦皆隨壞一切諸惡亦復如是因三毒故能生諸惡若三毒滅者一切諸惡亦皆隨滅若諸惡无者一切邪魔何能得便爲作留難)普法佛教も實修には空觀不淨觀等によりて三毒を除き諸惡の防止に努む即ち理として普法の新義を主唱し根本行としては空觀に立脚し一大圓修一成一切成の主張に向へる

もの、如し、喩如多人共殺二人以刀杖弓箭及以鉞棚不能殺得此人其力最大遇一切人此人若欲東西无能制者隨意自在學當根佛法亦復如是普法を信ずるものは刀杖を提げて寸鐵を帯びざる多人の中に入るが如く末法邪說多きも普法の人を害する能はず諸惡不能害已慧心起出邪境若欲往生淨土无能制者

問同普別何解今更有疑但是一切佛皆是好是上汝今所言唯道學下有何意(普法は超然根本の佛法といふ此の如き好上佛法が何故に實修に下法を學するや)

答曰佛法是勝上不用下者爲汝喩說譬如世人種菜欲得好菜必須屎糞而得生長大堪人食用痴人見之便作是言菜是人食若用糞屎云何可食名聲可惡欲得好菜是人食若用糞屎何可食名聲可惡欲得好菜應用金銀七珍等糞現相交好菜必勝上智者見之即訶言痴人不如是也何以故一切好菜皆從屎糞而得生長若道現相大惡用七瑣泥得好菜者无有是處七瑣雖好體同凡石不潤物云何糞菜若欲糞菜必殺於菜不能增長(脱行あるが如し嫌於下行學上法亦復如是如經說高原陸地不生蓮華卑濕淤泥乃生此華上好佛法不生於道下惡佛法乃有道生一種相似諸斷片か譬喩を擧ぐるや數々一種相似の語を用ふ譬喩一分の謂か)

支那佛教が中唐に及んで所謂蘭菊競美の盛觀を呈せしも動もすれば談論益高遠にして行修時に充實を缺くの嫌ありし時上好佛法を高調しつゝ下學佛法を實修せし三階教徒の主張や後代の佛教史上に幾多の暗示を貽せしものといふべし。當根佛法といひ迥然佛法といひ下學佛法といひ之を貫くに普法普佛を以てするもの豈に唯だ三階教のみとせんや。

問曰夫學佛法者皆悉衣生自利利他若學普法得兼己不前に七生盲佛法の終りに普法即ち體佛法は自利を先にするをいへり。問意は先學自利の佛法を難せるなり(答曰(中略)下根衆生亦復如是未得出世自是凡夫具有煩惱若欲利生不免還從緣起惡朱得法忍己來唯學自利不學利他得法忍己去緣不能轉欲利他者不在其限人あり他國に没落し他の奴となる本國に到らんと欲して晝隱夜行反つて途に捉はれて本國に至らざるが如しとの一喩あり專學普敬認惡空觀七一五不忤佛法者可生淨土一種相似七一五不忤佛法とは普敬の下の五種不忤盡佛法の類か。法忍は無生法忍にして大乘は初地に於て無生空理の理を信認せるを指す但し種々の法忍あり今三階師の判位を審にせず)

三階教徒の行法に關し釋淨土群疑論、

西方要決群疑論採要記其他史傳部等に傳へらるゝものありと雖も今は主として斷片に存せるものゝみを列舉せん。

第一斷片の經文

又明上來五門觀分時學法位判。自作如來藏等、四佛觀、乞食來往作認、育及應佛觀、入家次第乞食作普親觀、入家未食已前作食不淨觀、日沒初夜作空無相觀、臥時作無常觀、半夜已後先作不淨五門觀等、次作認多惡觀、始終常定五觀、次第章門從首至末十四日十五日緣一遍始終常定。三佛一門觀 一果德滿足即是眞佛 二佛性佛 三佛像佛 二佛性義當度法界衆生盡 三佛像佛者義當亦能度法界衆生盡何以故一切衆生但使有心敬者皆得五眼淨亦永滅一切法。是れ第二斷片の一節

晝夜六時發願法 信行禪師撰(奥題に禮佛懺悔文一卷とあり)

といへる一文と關聯し以て三階師が晝夜六時の行法を知るべし。晝夜六時發願法の一節を抄記すれば

六時禮拜佛法大綱晝三夜三各嚴香華入塔觀像供養行道禮佛、平且及與午時並別唱五十三佛餘階摠唱、日暮初夜並別唱三十五佛餘階摠唱、半夜後夜並別唱廿五佛餘階摠唱、觀此七階佛如在目前思惟如來所有功德應作如是清淨懺悔。

此に七階佛とは開元錄に廣七階佛名一卷具曰觀藥王藥上菩薩經佛名一卷か或は略七階佛名一卷といへるものゝ何れかを指せるなるべく、五十三佛は布薩式等に用ゐらるゝ普通のものなるべく、卅五佛廿五佛は某經中より取りしものならん。此等諸佛名を唱へて一切佛に歸し因て以て別佛偏歸の失を避けしなり。而して此等の功德を以て普く一切に及ぼさんと願するもの即ち發願たり。

第一斷片中の有作檀(施行の一節)を摘記するに

有作檀者發心乞食即作三意一我今乞食若得食已悉共一切衆生而共食之所得之食分作四分一分自食一分與同梵行者一分與貧窮乞人一分與餓鬼畜生由發心大故得福盡虛空遍法界。二我今乞食願令一切衆生以虛空爲庫藏一切財法悉令滿足。三我今乞食悉爲成熟一切衆生皆令具足檀波羅密而行乞食。

次に无作檀の一節を抄記せば

無作檀者於內有三種一者我今出家於一切世界寺舍僧伽藍內背有二時食分我今乞

食不食、僧食一切伽藍、二時食分、悉爲一切衆生供養一切三寶。二者一切齋食皆有食分、我今乞食不受三請、以此三請爲一切衆生供養一切三寶一切衆生。三者我今出家於一切檀越家、但到之處皆與我食、悉皆不受、我若不受、悉施一切衆生、有作檀とは物を以て施すをいひ、無作檀とは直接物を以て施すに非ざるも、此之三種雖不施物行者以智加法にして心地の施行とす。第一斷片中檀に四種を分てり曰く一破病檀(貪欲を破する事)二有作檀三無作檀四引導衆生檀是なり。今前後を略して中間の二檀を擧げしなり。以て三階院の生活を推知し得べし。

此他に尙引用すべきものなきに非るも今繁を厭ひて略す。(完)

## スコラ哲學に就いて (完)

征矢野 晃雄

### 五 心理學

スコラの分類によれば、心理學は物理學の一部である。勿論それは人間が小宇宙であり、天然の中心點である限り最も大切な部分であつた。其の十分なる發生は、十三世紀の哲學的精神の發達が最盛に達した時で、前時代の斷片的、非統一的説明の上に、人間の性質及び機能を対象としての包括的統一的的研究が試みられた。

(一)精神の機能、精神機能がよつて活動する處の力は、それを度々繰り返すことによつて容易に働く様になる。此の一定の方向に於ける働きの永續的性向を彼等は習性(Habitus)と呼んだ。力が精神とは別な實在性を有するか、或は同じ精神のエネルギーの種々な對象の上に向けられた異つた様式に過ぎないかの問題に關しては、偶存的實體とその働きの能力との關係を規定する彼等の形而上學に従つて解決せられた。

人間の生命機能に關して彼等は三つを區別した。即ち營養及び繁殖の低級なる